

# 科学史技術史通信

特定非営利活動法人申請中  
科学史技術史研究所

田中・山崎・飯田・菊池・道家文庫

No.6  
2010.5.20

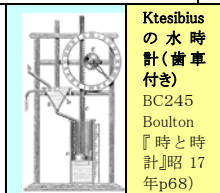
東京都中野区野方1-29-1アーバンアメニティ中野B101

Website URL: <http://ihst.jp/> e-mail: [ihst@ihst.jp](mailto:ihst@ihst.jp)



最古といわれるエジプト水時計(BC1400頃、コピー、チュールリヒayer 時計博物館)(本物はカイロ博物館)

古代から、中世の機械式時計にいたるまでの計時装置は、言うまでもなく太陽光や水、また中国の火煙式等様々な工夫がされたことは言うまでもない。上図は水量による計時方式であるが、「水」を使う方式はそのものはヨーロッパでは、機械式の時計が出るまで使われ、意外に長い歴史をもつ。ただし、「水」の使われ方は単なる古代的な量的な役割から、時計や歯車の導入などで、装置の推力的役割に転換し、しかも、その水推力装置は重力推力による機械式時計への転換の基盤をつくることになる。この展開過程の分析にも眼を向けることも興味ある問題である。



## 科学研究費補助金の採択状況と 日本科学史研究の分析

木本 忠昭

文科省・日本学術振興会の科学研究費補助金は、産業界とは直接関わらない競争的研究費として研究者に大きな意味を持っているが、科学史・技術史分野の近年の助成動向は、公開されているのは周知の通りであるので、この科研費助成金を分析することは、近年の科学史技術史分野における研究動向がどんな傾向をもっているかをみるための一つの考資料として利用できよう。いわば科学史研究「学」(科学史の科学)、あるいは「学の自己認識」学が成り立つとすれば、その範疇に属するものである。

ただ、助成金をうけたデータを扱うことは、「採択された結果」であるので、研究動向を直接反映するものではないが、関連はあると考えられる。

ただ、審査体制は、200年度前後から、審査委員の採用方法が従前の日本学術会議による推薦という大学や学協会と結びつきを強くもったやり方から、審査員を「上部から個別的な一本釣り方式」へと大幅に変わったので、研究動向を「採択結果」が

よりリアルに反映しているかどうかについては、より疑問の度合いが強くなって入るであろうが。この審査員は、現在は、

- (1) 科学研究費補助金の研究代表者
- (2) 学協会から情報提供のあった者
- (3) 学術システムセンターが特に必要と認めた者

を登録するデータベースをつくり、ここから審査員が選任されるものと見られるが、上述のような学協会の動向との乖離は否めないであろう。

適切な審査が行われているかどうかについては、採択課題と応募課題中の非採択課題を分析するしかないが、これはなかなか厄介な作業ではある。

もう一つ、科学研究費補助金の枠組み(カテゴリー)の変更が幾たびかなされているので、大型のプロジェクト研究と個人の「萌芽」「奨励」的研究など、時代による扱いの差もある点も留意が必要であろう。

ここでは、そうした幾つかの留保をしながら、単純にどう研究テーマが、研究費をえたか(→それによって、研究のが遂行されたか)を見る参考データとして、通覧的に見てみたい。採択結果は、日本学術振興会を通じての国立情報学研究所の科研費全データベース、さらには CiNii でも検索できるようになっているが、通覧的に総括することは、もちろん上述の課題採択の妥当性には責のある日本学術振興会の一義的な関心事ではなからうが、個別分野での研究界あるいは研究諸団体・機関側の自己分析として必要であると考えるからである。

これから読み取れるものは、幾つかあろう: テーマの時代的推移とか、研究費分布の研究者・研究機関別推移に傾向はあるのかとか、研究集団が形成されていっているのか(大型が増えているのか)等々「科学史」の歴史研究を見るための一資料として役に立つかもしれないと思いついたものである。

研究成果報告等も合わせて公開されているので、これらの研究費が実際にどのくらいの成果をあげたか等の検討を進めていくことはできないわけではない。

研究成果という視点ではもう一点、『科学史研究』や“Historia Scientiarum”等の科学史研究専門雑誌あるいは書籍等での公開、さらには科学史学会、国際科学史会議等の公开发表等との乖離の有無等も問題にはなろう。

ただ、この問題は、社会における学会組織の問題とも関係してくる。科学史技術史研究への科研費補助金は、現在では、基本的には科学社会学・科学技術史分野(細目)で審査され、補助されるが、科学史的技術史的課題が必ずしもこの分野(細目)だけで遂行されるわけではなく、経済史や英米文学、あるいは思想史的分野に関わる形で行われているし、そこで公開・発表されている。つまりは、科学史学会がどれだけ本分野の研究を包括しているかということにも関わっているわけである。

## 2009年度までの新規採択

脳神経科学と社会の相互作用—事例研究と枠組み構築—

佐倉 統 : 基盤研究(B): 東京大学

近世日本科学史史料の再評価に向けた総合研究

佐藤 賢一: 基盤研究(B): 電気通信大学

科学技術社会論と融合したクリティカルシンキングの研究および教育手法開発:

伊勢田 哲治: 基盤研究(B): 京都大学

臨床医工学をめぐるコミュニケーション・モデルの構築に向けて

霜田 求 : 基盤研究(B): 大阪大学

古代中世数学文献の図版のデータベース化

斎藤 憲 : 基盤研究(B): 大阪府立大学

空気力学史における計測の問題

橋本 毅彦 : 東京大学

戦後科学技術史研究方法論の実証的研究

木本 忠昭(定年の学内規定で辞退: 東京工業大学)

2頁以降には、次のような内容が掲載されています。会員配布の印刷物でお読み下さい。(本号は大幅増で、14頁になっています。)

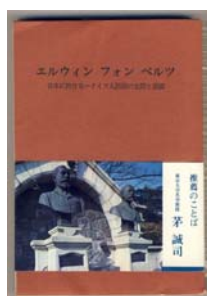
科研費採択課題・・・1頁の続き

### ◆◆◆ 本研究所蔵書から ◆◆◆

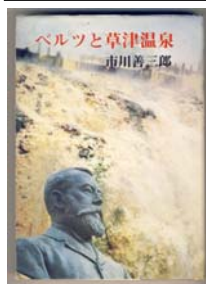
恒川 清爾

F.ショットレンダー (石橋長英訳) 『エルウィンフォンベルツ 日本に於ける一ドイツ人医師の生涯と業績』日本新薬株式会社, 1971年 (原著 1928年), 278+XXViii 頁

明治期の科学と技術を含めての近代化の展開過程を見ようとする者には、『ベルツの日記』は、必読文献である。日本国民を心から愛したベルツは、自らの選挙権や基本的人権を否定する明治憲法発布の前に、提灯行列に浮かれる国民を見て「お笑い草ではないか」・・・「近代化をすすめるには・・・日本国民は科学的精神を我がものになければならない」と冷静に当時の状況を観ていた。



市川善三郎 『ベルツと草津温泉』あさを社, 1980年, 281+xi 頁



鹿島卯女 『ベルツ花 エルウィンフォンベルツ夫人の生涯』鹿島研究所出版会, 1972年, 365+XXix 頁

ベルツ自身の書籍:



ベルツに関する書籍:

ベルツ夫人「花」や家族についての書籍:

参考情報：欧文科学史技術史関係  
既刊・新刊紹介

約50点紹介